

乳房再建手術体験者の体験記の分析 —テキストマイニングを用いて—

渡邊愛祈

明治学院大学大学院心理学研究科

いとうたけひこ

和光大学

山崎創

四谷ゆいクリニック

井上孝代

明治学院大学

日本心理臨床学会 第30回秋季大会 2011年9月4日(日)

福岡国際会議場

ポスター発表 10:00～12:00(10:00～11:00)【B2-5-15】

問題1 乳がん患者の心理的問題

- ▶ 乳がん罹患率の上昇
- ▶ 治療の高度化、多様化が進む
 - 外科手術療法(部分、全体)
 - 化学療法(化学療法とホルモン療法)
 - 放射線療法
 - 乳房温存療法(乳房温存手術＋放射線治療)主流
- ▶ 乳房の変形、喪失⇒ボディーイメージへの影響が大きい
- ▶ 女性にとっての乳房の意味
 - 女性性の象徴→がんと乳房喪失の不安
 - ボディーイメージの変容
 - 女性としてのアイデンティティの喪失

心理・社会的問題

問題2

- ▶ 術後のQOL向上のために
乳房再建手術への期待・需要が高まる

 - ▶ 再建を行う乳がんサバイバーの体験やそれに伴う
身体的・心理社会的な変化のプロセスなどの
研究の蓄積が必要(砂賀・二渡, 2008)

 - ▶ 先行研究
 - 乳房再建患者の喪失体験と再建前後のボディーイメージの変容の分析(谷口, 2004)
 - 再建を行った患者の思いを明らかにし、具体的イメージにつながる再建についての情報提供や専門的に関わる看護所kの必要性を示唆(尾沼・佐藤・井上, 1999)
- ⇒再建患者のQOLの向上について言及した研究は少ない

目的

- ▶ 本研究では、テキストマイニングの手法を用いて、乳房再建手術を受けた乳がん患者の語りの構造を量的に明らかにするとともに、体験記の内容や意味の質的分析を行うことを目的とする。
- ▶ 分析対象
- ▶ 真水美佳・片野佐保・川島直子・荒木経惟 (2010)
- ▶ 『いのちの乳房—乳がんによる「乳房再建手術」にのぞんだ19人』 (赤々舎)

方法

- ▶ 分析手順
- ▶ 対象となる体験記の内容や意味の質的分析
- ▶ テキストの量的分析
 - 単語頻度分析
 - ネットワーク分析
 - 評判分析
- ▶ 倫理的配慮
本書は一般に出版されている書籍であり、著作権に配慮した



いのちの乳房

「乳がんによる「乳房再建手術」にのぞんだ19人



写真 荒木経惟
全編 STPプロジェクト



結果1 体験記の内容の要約と基本統計量

▶ 要約

- ▶ 乳がん手術で損なわれた乳房を「乳房再建手術」によって取り戻し、同じ病気で苦しむ人たちのために「乳房再建手術」がどのようなものかを目で見る形で伝え、乳がんを美しく治す方法があると知らせることを目的として19人の女性たちの写真と体験が記されている。

▶ 基本統計量

項目	値
総行数	19
平均行長(文字数)	476.5
総文数	343
平均文長(文字数)	26.4
延べ単語数	3,309
単語種別数	1,358

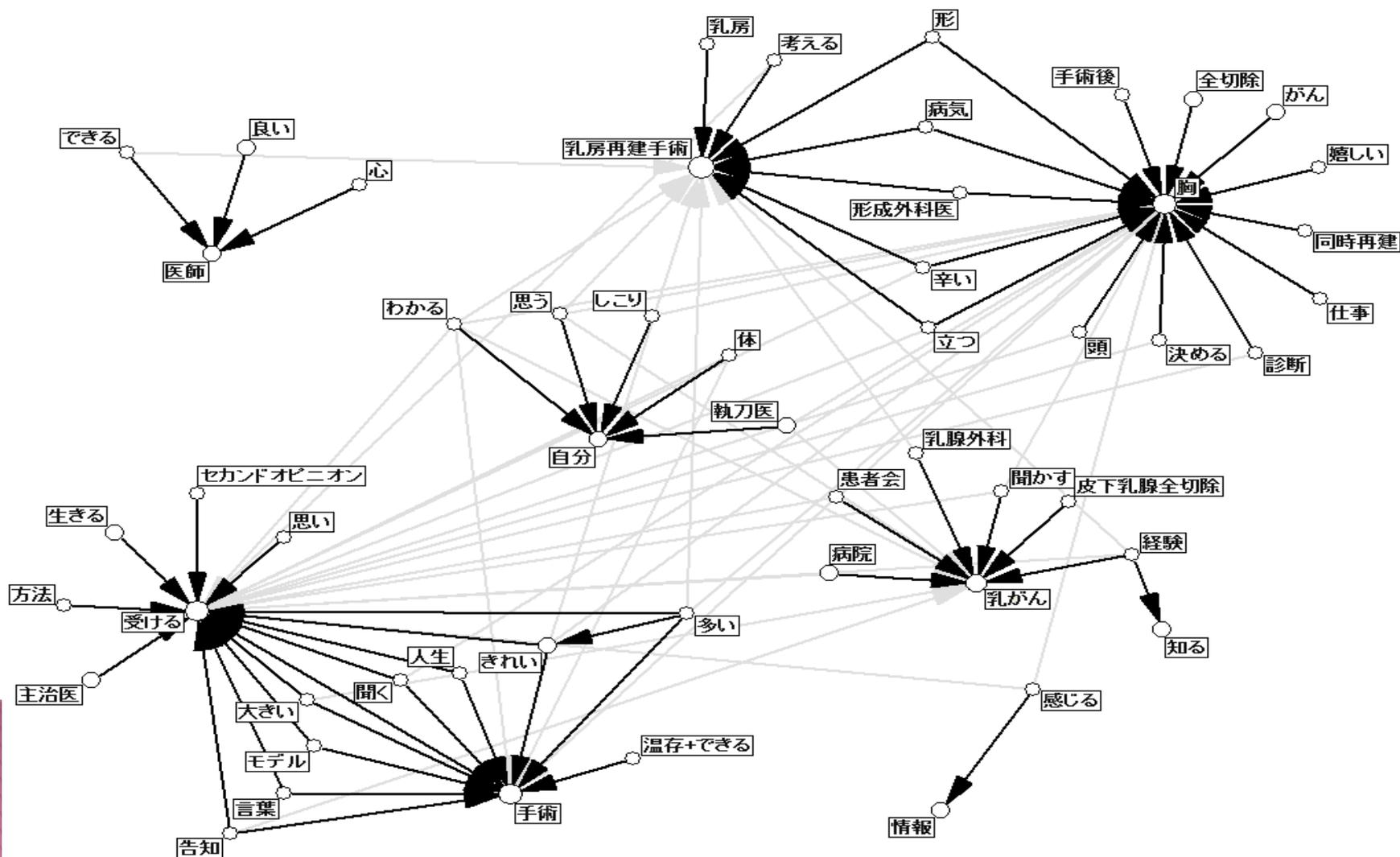
結果2 単語頻度分析

- ▶ 「再建手術」、「胸」、「受ける」、「手術」は約40回以上出現
- ▶ 上位17位までは手術に関する単語が多かった
- ▶ それ以降は「人」、「考える」、「命」など、これから生きていくためにどうするかといった気持ちに関する内容が多かった。

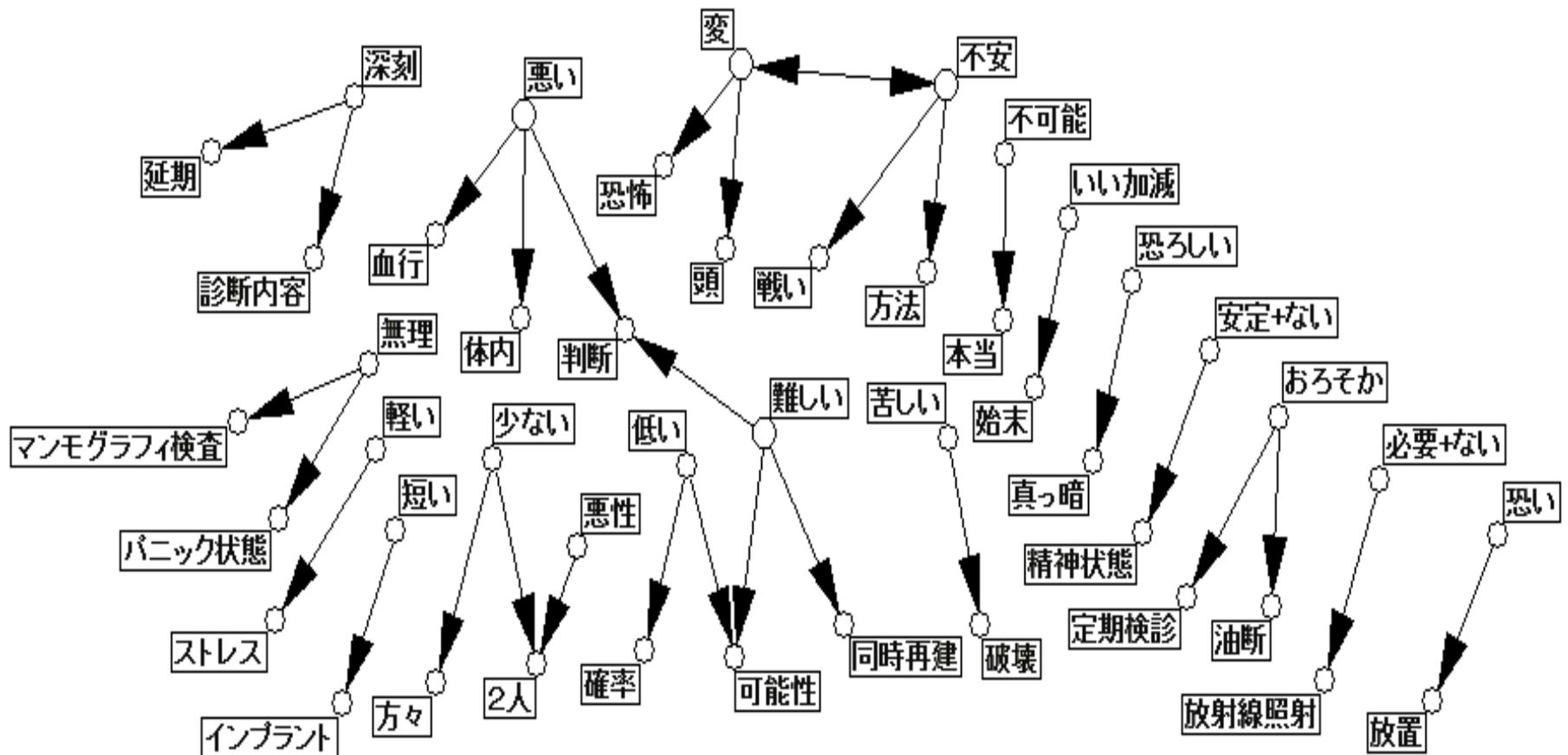
単語	品詞	頻度	単語	品詞	頻度
乳房再建手術	名詞	57	執刀医	名詞	13
胸	名詞	47	主治医	名詞	13
受ける	動詞	47	人	名詞	13
手術	名詞	39	命	名詞	13
乳がん	名詞	29	きれい	名詞	12
自分	名詞	21	良い	形容詞	12
医師	名詞	20	気持ち	名詞	11
全切除	名詞	19	考える	動詞	11
病院	名詞	18	大きい	形容詞	11
情報	名詞	16	乳房	名詞	11
生きる	動詞	15	方法	名詞	11
知る	動詞	15	嬉しい	形容詞	10
写真集	名詞	14	手術後	名詞	10
インプラント	名詞	13	心	名詞	10
がん	名詞	13	体	名詞	10

結果3 ネットワーク分析

- ▶ 6つの話題:〈手術を受けること〉〈乳房再建手術と胸〉〈乳がん〉〈自分〉〈医師〉〈情報〉



結果5 評判分析(ネガティブ)



考察1

- ▶ 19人の体験記の中にはネガティブな内容も含まれていたが、乳房再建手術だけでなく人生に対する楽観的な言説と自己肯定感のナラティブと、支えてくれた家族に対して、また、「本」として自分の体験を形にできることへの感謝の気持ちの表現がみられた。
- ▶ 自己イメージに関するコメント
- ▶ 【乳がんに関わる苦痛】が全体の約3割を占める
- ▶ 【手術と乳房喪失・変形へのコンプレックスとの間の揺れ動き】、【乳房再建への期待】、【乳房再建によって取り戻した自分らしい生き方・自信の獲得】、【生への感謝(生きることの再発見)】が約4割を占めた

考察2 乳房再建手術の有用性

身体的、心理・社会的な
喪失感



乳房再建への期待と不安



肯定的な自己概念の回復
QOLの向上

考察3

- ▶ 乳房再建手術が患者の心理的側面に与える影響
- ▶ 「身体的障害の改善・行動範囲の拡大・積極性・病気を忘れさせる・女性としての自信の復活」(上谷ら, 1993)
- ▶ 「女性らしさの新しい感覚を獲得し、自己のボディーイメージの価値を高めることができる。身体的、心理的統合を図り、内面の感情や幸福感も再発見することに寄与する」(Filiberti et al., 1986)
- ▶ ちなみに・・・
アメリカでは、乳がん治療は乳房が再建されてはじめて完結したといえるという考え方が定着している。

考察4 本研究の限界と今後の課題

- ▶ 対象者の偏り
 - 乳房再建手術に成功しモデルになっている積極的な人々
- ▶ 乳房再建手術は保健適応外
 - 乳房再建手術適合者であり、自費手術となるため経済的余裕が必要
- ▶ 合併症のリスク
 - 人工物を挿入した際の被膜拘縮
自家組織移植による血行障害(壊死)
- ▶ 社会的サポート
 - 主治医や患者の会での勉強会、知識の豊富さ

主要引用文献

- ▶ 真水美佳・片野佐保・川島直子 (2010) : いのちの乳房—乳がんによる「乳房再建手術」にのぞんだ19人 赤々舎
- ▶ 大高庸平, 城丸瑞恵, いとうたけひこ 2010 : 手術とホルモン療法を受けた乳がん患者の心理—テキストマイニングによる語りの分析から—. 昭和医会誌 70:302-314.
- ▶ 砂賀道子, 二渡玉江: 乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ. 北関東医学会 58:377-386, 2008.

体験記より

リンパ節へも転移していて、かなり大きく全切除せねばならないこと。並行して放射線、抗癌剤、ホルモン治療も必要で、放射線治療中には入退院を繰り返すことになることになると聞かされたときは、仕事もあるのに...と途方にくれる思いでした。

正直なところ、手術直後は片方の胸がなくてもそれほど不便に感じてはいませんでした。でも、患者会などで再建手術経験者たちの“美乳”を見せてもらううちに喪失感がつのりはじめ、経験者たちに励まされるように「乳房再建手術」を決意。こんなにきれいな胸を作っていただくことができ、頑張った自分へのご褒美だと感じています。

手術から1年半ほど経ち、リンパ節切除で上がらなかった腕が上がるようになってきたのでフラメンコを習い始めたんです。「キャンサーギフト」という言葉があります。がんからもらった贈り物とでもいえばいいのでしょうか。私の場合も、病気になったことで以前より素敵な胸と豊かな人間関係に恵まれ、素晴らしい写真集の企画とも出会うことができました。自分でも患者会を主催するようになり、こうして元気に時間を過ごせることや、自分を必要としてくれる場所があることに感謝しながら生きています。今度は私が、まだ見ぬ患者さんたちにギフトを贈る番です。

体験記より

まず抗がん剤治療に入ったのでした。それからの半年間は地獄のようでした。毎回、投与から3～4日間は高熱と吐き気に悩まされ、鼻血がしょっちゅう出るため人とも安心して会えません。人相はすっかり変わってしまい、まるで体の細胞がすべて破壊されていくかのような苦しさです。洗った髪を乾かそうとドライヤーを使えば、部屋中に抜けた頭髪が飛び散り、深夜、涙を押し殺しながら拾い集める辛さ。さすがに耐えられず、翌日カツラ屋さんへ行ってバリカンで丸坊主にしてもらいました。

「手術は温存か全切除になるが、放射線も必要。再建は不可能」という過酷な診断でした。「どんな胸になってしまうんだろう」と考えると恐ろしさで目の前は真っ暗です。抗がん剤治療後なので、早く手術しないと効果がなくなるというプレッシャーと、“がん難民”になったような深い孤独感のなか、やっといまの主治医にたどり着き、1ヵ月半後に皮下乳腺全切除による同時再建手術を受けることができました。あのとき「再建は不可能」と診断されたのを泣く泣く受け入れなくて本当によかったと思います。一度絶望の淵に立つたからこそ、胸を失わずにすんだ喜びの大きさも身にしみてわかります。

体験記より

温存できるかどうかは手術室に入ってからでないといけないとの診断。麻酔から覚めて、初めて胸があるかどうかを知るなんて、自分でもどう覚悟を決めればいいのかわからず、恐怖と不安で頭が変になってしまいそうでした。

他に方法がないかとネットの情報を探そうとしても、2分パソコンを見ては3時間泣き、気持ちを奮い起こして2分見てまた泣く...という繰り返し。周囲の人も親身になってくれ、「命が助かることが一番だから」と言ってもらえることはとても嬉しかったのですが、胸を失った状態でしっかりと生きていく自信が私にはありませんでした。

インプラントによる同時再建のことを知り、この方法で手術を受けようと決めてからも、ことあるごとに気持ちは揺れました。周囲が励ましてくれればくれるほど、命が助かる以上のことを求めることにどこか後ろめたさを感じてしまうのです。

モデルになる決意をしたのは、この体と一緒に生きていくと誓った、自分自身との約束を果たすため。手術後も精神状態がなかなか安定しなくて、色々なことでめそめそしたり落ち込んだりしていたのですが、おっぱいのほうは、そんなことには“我関せず”とどんどん素敵に回復しています。